

ハワイ移民史神話

崎原, 貢 / サキハラ, ミツグ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

319

(終了ページ / End Page)

337

(発行年 / Year)

1991-03-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015707>

ハワイ移民史神話

崎原 貢

一九九〇年六月オアフ島ホノルル郊外ワイピオ原頭に新築なったハワイ沖繩センターの開所祝いが沖繩県人ハワイ移民九〇年祭の中心行事として盛大に行なわれた。筆者も参加したが、適々面白い場面遭遇した。沖繩から派遣されたマス・メディアの記者が筆者の知人の二世をインタビューして曰く、「戦前は皆様さぞ苦勞なさったでしょうね」ところが、その二世が「いや、そんなに苦勞しませんでした」と答えたのである。沖繩からきた記者は慌てて、「大変苦勞なさったんじゃないですか」と飽くまで苦勞話を引き出そうとするが、相手がなかなか乗らない。何遍も押問答を繰り返した結果、その二世もようやく、あはあ、苦勞話を聞きたいんだな、と察して、その記者の期待している通りに答えた。「昔は一日十二時間も働き、一カ月で二十〜三十ドルくらいにしかならなかったんですよ。今と比べるとそれは話にならない程大変でした」と答えた。誘導尋問もいい所である。そういう誘導

尋問で作られた移民逸話が沖繩で報道され、それが「歴史」になっていく。そういう一般受けのする移民史には根本的な歪みがある。それは「血と涙と汗で綴られた移民史」であり、そこでは、すべて聞くも涙、語るも涙になってしまっているのである。典型的なシナリオは一世や二世は未開の移民地或いは苛酷な労働で大変な苦勞を強いられたが、艱難辛苦よく耐え、多大な犠牲をはらって、ようやく今日の成功、繁栄を築きあげた、というのである。⁽¹⁾それを真つ赤な嘘だというのではない。ただそういう浪花節的移民史を強調し、読者に媚びすぎると、可笑しな話になる。

たとえば、一九九〇年七月五日付けの琉球新報紙をみると、「初期の沖繩移民」という題で、故山里慈海師の「ハワイ移民ノート」を再録している。「一九〇〇年一月十六日エワ耕地に入耕した沖繩初回移民二六人は、直ちに厳しい重労働に従事しなければならなかった。契約下の耕地労働がいかに苛酷なものであったかは数多く移民史に記録され、今日なお語り伝えられているところであるが、これについて沖繩初回移民中、ハワイに残るたった一人の生存者金城珍善翁の口を借りよう。以下は昨年同翁が直接筆者に語った思い出の概要である。耕地労働はどこでも同じで仕事は厳しかった。四時起床、五時カウカウ（食事、ハワイ語より転用）、六時から仕事。炎天の下でルナのウィッパーに追われて働かねばならなかった私たちは牛馬とちつとも変わらなかつた。⁽²⁾この金城珍善翁の話は読者によほど強烈な印象を与えると見えて、よく引用され、初期沖繩移民の生活は「ルナと呼ばれる監督の鞭に追われる奴隷的労働だった」とされる。

しかし、もしそれだけが全てだったとしたら、毎年何千名と押し掛けてきた沖繩人移民は自分の家屋敷を抵当にいれて、渡航費を工面して、奴隷的労働に甘んずる為にハワイに移民した大馬鹿者揃いだったとしか言いようがない。第一回の移民はハワイの生活がどんなものだったか知らずにきたとも言えようが、第二回からは全然知らなかったとは言えないからである。たしかに移民会社のもに騙されたものの中にはいたようであるが、それでも全員が毎年毎年騙され続けたとでもいうのであろうか。信じにくい話である。

実際には一八九四年にハワイ共和国が樹立され、四年後一八九八年には米国に合併された。一九〇〇年から米国の移民法が適用され、その結果として契約労働が廃止され、三ヵ月後沖繩移民はみんな自由移民になったのである。だからこそ、後から後から押し掛けていったのである。くどいようだが所謂「契約による奴隷的労働」は沖繩県人ハワイ移民史の最初の約三ヵ月にしかみられないものなのである。

その所謂「契約による奴隷的労働」にしても、こういう見方もある。広島県人移民史研究者の児玉正昭教授によれば、官約移民時代（一八八五―一八九三）の日本人労働者の一般的給料は九ドル（当時九円）で、当時の日本では年雇いの農作男子の一年分にあたるという。児玉氏は「仕事はきつかったでしょう。しかし、まじめに一生懸命働けば、故郷に送金し、子供を学校にやって将来に希望を持つことができたのも事実です。それが意外と知られていない」という。⁽³⁾

さらに、週六日、一日十二時間働いたという事が移民地に特有の「大変な、奴隷的労働条件」なのであるか。よく考えてみると、一日八時間、週五日労働というのは、先進国でも、つい最近実現したものであり、一世移民たちの時代、一九〇〇〜一九三〇年ころには、まさに夢物語か、絵に描いた餅でしかなかった。同時代に沖繩から川崎や大阪の工場地帯へ出稼ぎにいった若い子女の労働条件と比較してみると、ハワイの一世たちの労働条件は楽ではなかったにせよ、日本と比較して、ハワイの耕地だけが特別に悪かった、「奴隷的労働」とする理由はないようにみえる。川崎や尼崎あたりの出稼ぎ労働者の実態は今更ここで紹介するまでもないだろう。「女工哀史」などを一読すれば足りることである。また沖繩と比較せねばならないとすれば、新城朝功の「瀕死の琉球」や湧上聾人の「琉球救済論集」でも一読すれば、ハワイのどこにも見られなかった、悲惨な生活が沖繩にあった、そしてハワイ移民はそういう沖繩の赤貧の中から生まれたというのが事実であるというのに気が付くだろう。また強いて大正時代までさかのぼらずとも、現在でも週六日、一日十〜十二時間労働が実質的標準である社会は案外おおいようにみえる。また標準としては一日八時間制であっても、残業などで一日十〜十二時間労働を強いられている人は我々の周囲に案外かなりいるのではなからうか。

それに、文頭にあげた、つまり、昔は一日十〜十二時間も働き、一カ月で二十〜三十ドルしか儲けなかった。だから、いまと比べると奴隷的賃金だったという議論もよく聞く。例えば豊平良金によれば、一九一六年当時「アイエア耕地で一般労働者の賃金は一カ月（二十六日）就働で二十ドルであつ

たから、日給換算で八十セント弱、時給にすれば八セントである。一九八十年一月現在、アメリカの連邦法定最低賃金は時給三ドル十セントである。時代の推移といえその差額の大きいのに驚く。まさに奴隷賃金であったのである。沖繩移民はこんな些少な賃金で家計を立て子女を教育し、そして郷里の家族へ送金した。明治四十年度には約五十万円の郷里送金をしたことが記録に残されている。⁽⁴⁾

現在（一九八十年）の時給が三ドル十セントであるのに、昔はたった八セントだったというので奴隷賃金と言っている。ちよつと試算してみると、八セントは三ドル十セントの約三九分の一である。他の日常物価と比較してみよう。一九一六年には「豆腐五セントで三丁」、「一カ月の食費は五ドルないし六ドルですんだ⁽⁵⁾」という。現在（一九九十年）「豆腐三丁で、やく四ドル五十セントである。食費などと言うものは、個人差が大きいが、若者一人だと、現在やはり月四〇〇ドル位するのではなからうか。そして、連邦法定最低時給が約六ドルである。一九一六年の労働者の時給八セントで豆腐を買うと、四・八丁買えた。現在の連邦法定最低時給六ドルでは四丁しか買えない。すると、豆腐にかぎり、当時の方がいくらかよかつたことになる。また当時約二十ドル賃金をもらって、食費が五・六ドルだったという。給料のやく四分の一が食費である。今日（一九九〇年八月二五日）の新聞の就職欄をみると、二年の経験のある受付嬢の初任給が千ドル強というのがあった。もつと経験が豊富でコンピューターができれば、千二百ドルという。すると、給料の中で食費の占める割合は約三分の一であり、生活は昔と比較して決して楽ではない。見方をかえると、昔の方が生活が楽だったので

ある。勿論、八十年も前と比較すれば、一般的な生活水準は高くなっている事は論をまたない。豆腐の値段や給料の単純比較で生活全般を推し量る事には難点があるのも当然である。しかし、昔は今の二十分の一の給料だったから、奴隷的労働賃金だったという事の馬鹿らしさを指摘したまでである。さらに、豊平は、些細な賃金で家計を立て子女を教育し、そして郷里の家族へ送金をした、明治四十年には約五十万円も郷里送金をした、という。それは些細な賃金だったにも関わらずではなく、反対に些細な賃金ではなかったからこそ、そんな多額の郷里送金が可能だったのであろう。無から有は生み出せない。沖繩県人は自分は食うや食わずで、赤貧に甘んじ、故郷に多額の送金をしたというのは、たしかに美談になりうる。しかし、私は美談というものには何となく胡散臭さを感じる。一人や二人の例外的美談はありえても、沖繩県人全体が揃って美談の主人公だというのはどうも素直に頂けない。

前期の金城珍善翁は初回移民の生き残りであるというので、その信憑性はかなり高く評価されているようであるが、留意しなければならないのは、山里師は一九六三年の時点で、「昨年翁が直接語った」と言っていることである。すると金城翁と話した時点は一九六二年で、六十年以上も昔のことを話しているのである。いくら当事者とはいえ、無批判的に受け入れてよいものだろうか。昔話をする人間の心理であるが、我々は得てして、昔は大変だったよ、と言いつつ、言外に今の若い者は楽をしているとか、想像もできないだろう、と言いたい気持ちがあるのを、認めざるをえない。昔は大変だったという事によって、その昔を乗り越えてきたもの達は必然的に英雄になるからである。昔の困難は大

きければ大きいほど、生存者たちは、その子孫の目に大きく映るのである。

また、その話を聞き伝える子孫にとっても、自分の父祖がのほんとして、人生をおわったというよりも、大いなる困難に立ち向かって、これを征服し、偉業をなしたとげたという事が単に気持ちがいいのみならず、自分もその父祖の血を受け継いでいる事をおもい、話は無批判的に受け入れられ、ますます誇張されていき現代の神話が創作されるのである。

それでは当時の人が当時語った証言があるだろうか。幸わい、一九〇二年三月に当山久三にハワイにいた弟の又助から書いた手紙が残っていて、それによると、「私たちは当地着の初めは言葉も分からず仕事の道も分からず言われぬ程の心配なりしも近來その心配もなくなり金儲けも日を追って面白く相成りおり候。米国の法律当地にも行なはれ私達も自由移民と金儲けも尚まさり受合仕事は二十六月間の平均日本貨幣参円若しくは四円より五円も有之候。食糧は月拾弍参円小使金は四五円にて余は貯へ居候。中略今は国に帰りても差し支へなき分は金も儲け居候。かかる次第にて金儲けにはこの国の外なき土地と思ひ候。」⁽⁶⁾初期移民の問題点と最大関心事を簡潔明瞭にのべている。農村育ちの又助にとつては労働そのものは殊更いう程の苦痛ではなかった。ただ言語の不通と仕事の不馴れには困ったが、そんなのは時間が自然と解決してくれるし、又助には契約労働が廃止され、金儲けも面白くなったというのは実感であったらう。もちろん「奴隷労働」などというものではなかったようである。第一回移民には当時の沖縄県知事奈良原繁が条件をつけ、農村出身者だけでなく、首里那覇の

都会の人間も入っていたという。都会育ちにとってはたしかに「奴隷労働」に近かったかもしれない。当山久三もその点に気付き、一九〇三年の第二回移民は全員農村出身者で固めている。その後は割に順調にいった様である。

一九二五年七月から翌年四月まで満九ヵ月当時沖繩県海外協会副会長をしていた太田朝敷が沖繩県人移民の家情調査のためにハワイに滞在した。その視察報告によると、耕地労働者がおおいが、年々独立経営者が増加する傾向が見られる、また人口増加率が高いが、子供の「養育は。郷里では夢想することも出来ぬほど行き届いている。第一食物がよいので皆血色がよく元氣と活氣が充満している。衛生法が行き届いているので、皮膚病などはいくら捜しても見当らない。それから教育は都郡ともにもれなく学校にだしている。距離の少し遠い所だと、耕地の会社が大きな自動車を出して送り迎えしている。それから八年の小学教育を終わってハイスクールや大学に入っているのも随分⁽⁷⁾いる。」

さらに一九二八年伊波普猷が来布し、その報告として、「布哇物語」を書いている。それによると、日本人移民の初期のころは「一種の奴隷制度」だったと言っているが、一九二八年ごろは「生活は非常に向上し、彼らの住居はほとんど理想的で、加哇島のリフエのプランテーション・ビレッジのごときは、カリホルニアの農家も遥かに及ばない位である」と言い、労働条件も「その労銀は一日一ドルのいわゆる基本労銀なるものであるが、これは最低労銀の移民で新米無経験の男子労働者に支払われる最低の労銀で、砂糖耕地労働者は、その外に家屋・飲料水・燃料を無料で支給され、かつ本人およ

び家族に対する医薬手当でも無料で与えられる。これは古参新米の区別なく等しく支給される。また別に奨励金制度なども設けられている。万一肺でも患った場合は、マウイ島の海拔三千フィートの山腹にある世界一といわれクラの肺病院に送られて、一生を楽しく送ることも出来るのである。こうして最低労銀の下で働く労働者は全数の約五パーセントに過ぎず、他の九割九分は皆一日一ドル以上の労銀をうけている。労働者がどれ程儲けるかは当人の能力次第であるが、請負制度という都合のいい事があつて、その下で働く者には多額の収入のある者も少なくない。⁽⁸⁾と称賛している。

さらに、太平洋戦争のハワイ、米本土、沖繩への影響を比較してみたい。まず米本土では太平洋戦争勃発と共に日系人十二万六九四八人のうち、実に約八九%にあたる十一万二五八〇人が西部沿岸州から追放され、強制収容所に監禁され、彼らは長年に亘つて営々として築いた財産を一朝にして失つた。⁽⁹⁾沖繩では一九四五年の沖繩戦で沖繩本島が戦禍にあつたのみならず、全人口の約十五%にあたる凡そ十五万人が犠牲になつた。⁽¹⁰⁾それに比較すると、ハワイでは当時の日系人総人口十五万九五四人の1%にも満たない、わずか一四四四名の指導的地位にある人たちが抑留されただけである。⁽¹¹⁾のみならず、ハワイは全太平洋戦域の大兵站基地として軍需景気に沸き立った。月給生活者も相応に潤つたが、殊に必需物資生産者（農業や畜産業を含む）はみんな一躍成金になつたといつてもよいほどだった。ここで想起して欲しい事はナイチに比較して沖繩県人は遅く来布したため、第一次産業である農業や養豚、養鶏など、またレストラン業に圧倒的に多かつた。所が皮肉にもそのお陰で、互い

の相対的地位が交替し、砂糖耕地からいち早く都会に脱出したナイチから、オキナワ ケンケン ブタ カウカウと馬鹿にされた沖繩県人の地位が比較的急速に向上し、ナイチに追い付いてしまった事である。氏名はあげないが、現在レストラン業や畜産業、スーパーマーケットなどで名をなしている県人には軍需景気につて頭角をあらわした人がすくなくない。もちろん此等の成功者は単に軍需景気につて成功したのではない。それなりに大変な努力はしているが、それにしても米本土や沖繩と比較すると、幸運だったといわざるを得ないのではなからうか。

ハワイ沖繩県人の伝統的美点として自他共に認め、また誇るものに団結心或いは連帯意識の強さという事がある。裏返せば、仲間意識がつよく、排他的であるという事にもつながる。今年のハワイ沖繩文化センター完成に関しては、その団結心が見事に結実したともいえる。県人自身誇りにおもしろい、沖繩には「イチャレーチョウデー、ヌーヒダティヌアガ」(道で逢っただけでも、兄弟同様だ、何の隔てがあるものか)という諺があるなどと説く。ところが本当に沖繩県人は団結心が強いのだろうか。試みにハワイ沖繩県人の歴史をひもとくと、意外な事実が気が付く。沖繩県人移民が開始されたのは一九〇〇年であり、それから七年後の一九〇七年にはいち早く沖繩県人会が組織されている。ところが数年後に消滅してしまった。十年後の一九一七年にはまたハワイ沖繩県人同志会というのが発足したが、これも長続きしなかった。それから幾つか似たようなのが出来ては潰れたりしているが、恒久的な団体、現在のハワイ沖繩県人連合会が成立するのは結局半世紀もすぎた一九五一年九月まで待た

ねばならなかった。以前の県人会が潰れた原因をさぐってみると、いづれも大同小異で、熾烈な個人或いは団体間のエゴの衝突や嫉妬の感情、足の引っ張り合いが底辺にあったようである。諺などは一面の真理しか顕さないのである。

それでは沖繩県人は団結心はないのか、という強ちそうでもない。現在の沖繩県人連合会の下部組織であり基礎的単位をなす市町村人会というのがあつた。現在全ハワイ州内でおよそ四十位ある。その中でいちばん早いのは金武村人会で一九〇八年に発足しているが、多くは一九二〇年代に発足している。これらの市町村単位の団体は、太平洋戦争中に政府の圧力で余儀なく閉鎖した以外、ずっと継続している。とすれば、団結心はかなり強いとせねばならない。

それでは下部組織は強力であるにも関わらず、上部組織が脆弱であるという現象をどう解釈したらよいのだろうか。第一に下部組織である市町村人会のメンバーはすでに何百年にも互つて培われた強力な血縁および地縁で結ばれており、市町村人会はその結合体を正式に認めたとすぎない、という事実である。第二に市町村人会は団体のための団体では無く、事実上その構成員のために機能している（たとえば、冠婚葬祭など村人会の協力なくしては惨めなものになる事は疑いないし、ことに葬を重んずる沖繩人社会に於いては重要である）。所が沖繩県というのは明治政府によつて半ば人為的に構成された政治的組織であり、その全構成員が利害を共にしたという過去の事実はない。上流士族、下流士族、平民と分かれ、また平民は各村落に分かれ、隔離されて生きてきた。そこには縦横の相互間

の連帯意識などまったくなかったといえる。その事に就いて、比嘉、霜多、新里共著の『沖繩』から引用したい。「村は地縁集落であるとともに、血縁集落としての性格が濃厚であり、それだけに封鎖性も強かった……。そして、この小宇宙の封鎖的孤立性は、村落相互のあいだに、共同の利害とそれにもとづく連帯意識をうみだすことを極度に困難にした。⁽¹²⁾」そして琉球処分以後の明治政府の沖繩統治は旧慣尊重を眼目とし、県とは名のみの特別県政で、諸制度の改革は大幅におくれ一九二〇年前後になって漸く全国並みになった。⁽¹³⁾すると、一九〇〇年から一九二四年まで続いた沖繩移民の大部分は沖繩県人としての連帯意識をもつことなく、孤立封鎖的な村落からハワイへ直行移住したことになる。ハワイに移住してからも、金武、小禄、西原、与那原、糸満、本部などかたまつた儘、他民族のあいだに隔離されて狭まり、法的には沖繩県人であっても、実際には金武人、小禄人、西原人、与那原人、糸満人、本部人の儘でいたのではないのか。実際に戸籍抄本に「沖繩県」と記入されている以外に共通するものは少なかった。

その少ない共通事項にナイチによる沖繩県人への差別という事がある。この事は後でまた取り上げるけれども、そういう沖繩県人への差別に対して、誰よりも切齒扼腕して悔しがったのは沖繩出身の知識人たちだった。彼らは率先して色々な啓蒙運動を行い、沖繩県人の民度の向上をはかり、ナイチの前でも恥ずかしくない沖繩県人であろうとした。その運動のひとつが全ハワイを網羅する沖繩県人会の結成だったが、インテリの悪い癖で、県人会結成の目的が理論的、観念的にすぎ、また一旦結成

すると、各自強い個性を持っているために、早かれ遅かれ個性と個性の衝突がおこり、県人会は結成しても長続きはしなかった。また個性の衝突がなくても、市町村人会とちがって、全ハワイ沖繩県人会はその構成員のために機能する事はなにもなかったから、長続きはするはずはなかった。

最終的に現在のハワイ沖繩県人会連合会が一九五一年に成立したのは、幾つかの要因があるが、それらを挙げてみる。

(1) 一世から二世、三世の時代へ変わってきたこと。ただに人間の交替という以上にその人たちの受けた教育や周囲の環境の変化をも意味する。たとえば、一世の時代には、みんなそれぞれ糸満人、与那原人であり、本部人、首里人、那覇人であり、言語でもすぐ分かった。そしてナイチカラみると、みんなオキナワだった。所が二世三世の時代になると、みんな一用に公立学校で英語によるアメリカ的教育を受け、言語や生活環境も似たようなものである。つまり、日本文化（乃至オキナワ文化）から主流であるアメリカ文化への同化作用が進展したことである。

(2) 太平洋戦争の勃発により、日系人はナイチ、オキナワを問わずすべて敵性外国人とみなされ、同様な取り扱いを受けた事。そうなれば、隣家が火事になったのに、兄弟喧嘩などして居られないのと同じである。殊に若い者は同じアメリカ人として軍隊に入り戦地で生死を共にした。その貴重な経験による仲間意識がハワイに帰還後も持ち越され、戦前の偏見や差別がなくなった。同じ釜の飯を食ったのである。

(3) 戦争に行かなかったものも、ハワイで日本語の使用が禁止され、英語のみとなると市民権もち、英語族である二世や三世に自然と社会的主導権が移ったこと。また日本文化の拠点であった寺院や日本語学校などが閉鎖に追い込まれた事も影響しているだろう。

(4) 一九四五年に沖繩が戦禍にあい、その救援運動は小さい市町村単位では不可能で、全沖繩県人が一丸とならなければならなかった。それに又県人のみならず、ナイチも他人種の人たちも全力をあげて参加してくれた。こういう共同体験が小さい差別をなくし、大きく固まるのに役にたったようである。

(5) 戦後沖繩が無期限的米軍占領統治下にあり、ハワイの沖繩県人社会が沖繩の救援その他の問題で有効に機能するには全沖繩県人を代表する機関が不可欠だったことも、沖繩県人連合会結成とその持続、支持に強い影響があったといえる。

もし私がここにあげた要因が正しいとすれば、沖繩県人が団結できたのは、沖繩の伝統的文化、つまり、我々のよく言いたがる、「イチャレーチョオデー」的伝統ではなく、まったく非沖繩的な要因、世界中から移民を引付け、平均化してしまう、強力なアメリカ的な生活様式（言語・文化エトセトラ）や、戦争という個人差を無視する力などが集中した結果ではないのだろうか。もし、「イチャレーチョオデー」精神で戦後皆が団結したというなら、なぜ「イチャレーチョオデー」精神が戦前は、五十年もの長いあいだ、作動しなかったのだろうか。もちろん私は現在のハワイに見られる沖繩県人

の団結が非沖縄的な要因で可能になったらとて、その事で団結を卑小に評価するものではない。ただ、沖縄県人の見事な連帯感、団結を説明するのに、あまりにも安易に沖縄には「イチャレーチョオデー」という美しい伝統がある、で片付けるのは学問的でないし、無批判的でありすぎる。諺でいうなら、「チョオデーヤ、タニンヌハジマイ」と言うのもあるし、日本にも「袖振れあうも他生の縁」とか「旅は道づれ、世は情け」という諺があるではないのか。諺は結局真理の一面を言うのみであり、それで一つの社会的現象を説明しようとするのは余りにも安易にすぎると言いたいのである。

最後に戦前あれほどあったナイチによるオキナワへの差別に関して、若い人たちの間ではすっかり姿を消したようだし、表面ではもはや誰も言及する人はいない。しかし、戦前苦しんだ人たちの間ではなかなか完全に忘れきれないようである。ふるい泥沼の深いそこから浮かび出てくる泡のように、ときどきプツ、プツと出てくる。そういう差別に関して、ここでは私なりの解釈を試みたい。差別の実例は多くは挙げないが、⁽¹⁵⁾色々な面での執拗なほどの差別があったというのは事実である。たとえば、ある広島県人が自分の息子が沖縄県人の娘と結婚したのを憤り、毒を飲んで自殺したとか、あるキリスト教会の牧師に沖縄系二世がなったとたん、その協会のメンバーのナイチが全員やめてしまったとか、枚挙にいとまがない。そして、沖縄県人はこれ对自己に対する個人的な侮辱として受けとり、恨み骨髓に轍する思いでいた。ある沖縄県人の牧師は、沖縄県人は「日本人に対して根強い憎悪をもち、――決して日本人と融和できない」、また「連合軍が琉球を占領するのをできうる限りの手

段で援助したい。……沖繩が日本支配から解放される日を期待している⁽¹⁶⁾」と明言している。

アメリカの歴史を読むのに幾つも読み方があるが、その一つにアメリカ史は差別と弱いもの苛めの歴史であるという読み方もある。憲法には人間はすべて自由であり平等であると書いてあるが、それは飽くまでも理想であり、現実ではない。たとえば、アメリカは移民の国であり、建国以来世界のあらゆる国からつぎつぎと海を渡ってくる移民によって成立し、強大になってきた。所で先輩移民は後輩移民を両手をあげて歓迎したかという、必ずしもそうではなかった。たとえ、両者が同民族であつてもである。そういう事実をあらゆるさまに論じたスタインベックの『アメリカとアメリカ人』⁽¹⁷⁾がある。ちよつと長くなるけれども、引用したい。

「われわれは初めから少数民族をひどく取り扱つた。彼らの皮膚や髪の毛や目の色が違つていたり、英語でない言葉をしゃべるとか、新教でない教会におまいりするというだけでなく、新参者が貧しく、数が少なくなつても助ける者がいないというだけで、その圧迫とサディズムの仕組みは動きだした。

ピルグリム・ファーザーズはカトリック教徒をいじめ、両方ともユダヤ人をやつつけた。次にアイランド人がしごかれ、続いてドイツ人、ポーランド人、スロヴァキア人、イタリア人、インド人、中国人、日本人、フィリピン人、メキシコ人が順番にしごかれた。われわれはこの人たちを“ミック”(アイル人)、“シーニー”(シナ人)、“キャベツ野郎”(ドイツ人)、“デーゴ”(ラテン人)、“ワック”(イタリア人)、“ぼろ頭”(東洋人)、“黄腹”(東洋人)などと馬鹿にした名前と呼んだ。各ゲ

ループに対する罵りは、それぞれが健全で、なごやかで、自己防衛力を持ち、経済的に人並みになるまで続けられ、そこでグループは古参グループの仲間入りをし、一番新しくやってきたグループに突撃した。このように新参者を残酷に扱ったからこそ、種族的、民族的なよそ者が急速に、“アメリカ人”に同化したのではないかとさえ思われる。

自分がひどい目にあつたから、新入りをかわいそうに思ったかもしれないと考える人もいようが、そんなことはなかつた。彼らは多数派の仲間入りをしてから、新入りグループをしごくという、上流階級の公認の行動にふけるのを待ちきれなかつたのだ。

最初の入植者は海岸に上陸し、靴にまといつた海藻をとるやいなや、後をふりかえつて祖国に向かい「もう、こなくてもいいぞ。これでいっばいだ」と叫んだらう。各入植者が新参者に抵抗した異常な激しさは、移民法がいに他国者の流入を細くし、さらにぼつりぼつりと隼のようにするまで続いた……事実、われわれは、苛める相手がいなければ、それをつくり出さねばならぬ、という態度だつたといえよう。⁽¹⁷⁾

スタインベックの見方が正しいとすれば、(そして私は彼に賛成しているのであるが)古参が新参を苛めるのは、アメリカという移民社会に常にあつたことであり、別に珍しいことではなかつたということである。ただ、先輩グループや後輩グループの名前が異なり、場所が異なるだけのはなしである。どこでも新参者は常に成功という名の階段の最下段から汗をかいてよじ登ることを要求されたの

である。そうでなければアメリカ社会の一人前の成員として認められなかったのである。それは丁度人間の一生における成年儀礼とも言うべきもので、別にナイチがオキナワを個人的に嫌い、苛めたというより、団体儀礼的なものだったとしたら、どうだろう。仮にオキナワが先輩だったとしたら、後からきたナイチに、イチャレーチョデー精神で親切にしてやっただろうか。残念ながら、言葉がちがう、習慣がちがう（それは当然の事であるが）とかいって、やはり苛めたであろう。それはアメリカという移民社会に新参の移民グループが社会の主流に参加を許されるために必須の団体的成年儀礼だからである。

- (1) その典型の一つとして、豊平良金、「呼寄せ移民の苦難と栄光」『新沖繩文学』、四五号（一九八〇年六月）、六四―七三頁、がある。
- (2) 琉球新報、一九九〇年七月五日
- (3) 読売新聞、八五・一・二五、「ハワイの日系人」#9。
- (4) 豊平良金、上掲、六七頁。下線は筆者。
- (5) 上掲、六七頁。
- (6) 崎原貢、「沖繩の移民たち」、『言語』一九八三年四月号、二八五頁。
- (7) 崎原貢、「沖繩県人ハワイ移民史」『ハワイ パシフィック プレス』、一九八〇年七月、太田朝敷、「ハワイにおける沖繩県人」、『沖繩および沖繩人』一九二六年六月より引用。
- (8) 崎原貢、上掲書、一九八〇年八月号。
- (9) 足立聿之、「ハワイ日系人史」、一九七七年、一一一頁。

- (10) 宮城栄昌、『沖繩の歴史』、一九六八年、二〇五頁。
- (11) 足立、上掲書、一〇五―七頁。
- (12) 『沖繩』一九六三年、一〇六―一〇九頁。
- (13) 上掲書、一三二―一三三頁。
- (14) 最近“Uchinanchu・A Pictorial Tribute to Okinawans in Hawaii” (East-West Magazine, 170) という本が出版された。その序文はハワイ沖繩県人界の長老、宮里肇博士の文である。所がその序文の三分の一も費やして沖繩人が受けた差別に言及しているのを見て、功なり名遂げた宮里氏にして今日なお忘れない事に驚くと共に、戦前の沖繩県人がどんなに悔しい思いをした事だろうと、今更のように筆者も心を痛めた。
- (15) さらに戦前のハワイにおけるナイチによるオキナワへの差別の実例については、崎原貢、「琉球列島の沖繩人・日本の少数民族」、『部落解放史ふくおか』、五五号、一九八九年九月号、一一二―一五四頁を参照せられたし。
- (16) 上掲書、一三〇、一四九頁。尤も同人は戦後日本政府から勲章をもらっているのに、本人が思ったほど根強い恨みではなかったようである。
- (17) ジョン・スタインベック、『アメリカとアメリカ人』、大前正臣訳、一九七五年、一二―一四頁。